

## シリーズ

「ある監督官の問はず語り」(第 9 回)  
—セメント樽の中の手紙—

労働条件、あるいは労働安全衛生をテーマにした文学作品がある。

最も有名なものは「あゝ野麦峠(山本茂実)」だろう。飛騨からの出稼ぎ女工がいかにも劣悪な環境で働いているかが綴られたノンフィクションであり、労務に携わる者であればあらずじだけでも触れておくべき作品だ。

もうひとつ、筆者はぜひ「セメント樽の中の手紙(葉山嘉樹)」という短編をぜひ皆さんに読んでいただきたい。

以下、その要約を掲載する。著作権は切れているので、問題ないと思われる。

松戸与三は、セメント開けという仕事をしていて。十一時間、鼻の穴がコンクリートで埋まるのも構わずヘトヘトになるまで行う肉体労働だが、それで家族が養えるほど十分な収入になるわけでもない。

「チェッ！ やり切れねえなあ、かかあは又腹を膨らかしやがったし……一日九十銭の日当の中から、日に五十銭の米を二升食われて、九十銭で着たり、住んだり、べらぼうめ！ どうして飲めるんだい！」

ある日、与三がいつものとおり仕事をしていると、セメントの樽から小さな木箱が出てきた。

木箱の中には、ポロに包んだ紙切れが入っていて、そこにはこう書いてあった。

『……私はセメント袋を縫う女工です。私の恋人は破碎機へ石を入れる仕事をしていましたが、十月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に破碎機の中へはまりました。

仲間の人たちは助け出そうとしましたが、水の中へ溺れるように、石の下へ恋人は沈んでいきました。そして赤い細石となって、ベルトの上に落ち、粉碎筒へ入っていきました。細かく、はげしい音に呪いの声を叫びながら砕かれ、焼かれ、立派にセメントとなりました。

骨も、肉も、魂も粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになってしまいました。残ったものはこの仕事着のポロばかりです。

私はその次の日、この手紙を書いてこの樽の中へ、そっと仕舞い込みました。

あなたは労働者ですか。そうだったら、私を可哀そうだと思って、お返事ください。この樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか。私はそれが知りとうございます。

私は、恋人が劇場の廊下になったり、家の塀になったりするのを見るに忍びません。ですけれど、それをどうして私に止めることができましょう！ あなたがもし労働者だったら、このセメントを、そんなところに使わないでください。

あの人は優しい、いい人でした。そしてしっかりした男らしい人でしたわ。まだ若うございました。二十六になったばかりでした。あの人はどんなに私を可愛がってくれたかしれません。それなのに、私はあの人に経帷子を着せる代わりに、セメント袋を着せているのです。あの人は棺に入らないで回転窯の中へ入ってしまいましたわ。

あなたがもし労働者だったら、私にお返事くださいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着のきれをあなたにあげます。この手紙を包んであるのがそうなのですよ。このきれにはあの人が染み込んでいるのです。あの人がこの仕事着で、どんなに固く私を抱いてくれたことでしょう。

お願いですから、このセメントを使った月日と、どんな場所へ使ったかと、それにあなたのお名前も、ご迷惑でなかったらお知らせくださいね。あなたもご用心なさいませ。さようなら……』

与三は、子供たちの騒ぎを身の回りにおぼえながら家に帰った。茶碗に注いであった酒を一気に呷った。

「へべれけに酔っ払いてえなあ。そうして何もかも打ち壊してみてえなあ」

「へべれけになって暴れられてたまるもんですか。子供たちをどうします」

そういう細君の大きな腹の中に、与三は七人目の子供を見た。

——先日、新名神高速の工事で、もう何度目になるかもわからない事故が起きた。幸いにして死者はなかったが、ハインリッヒの法則からすればたまたま免れただけのこと。まかり間違えば死亡災害となった可能性は十分にあった。

兵庫では毎年 40 件前後の死亡災害が起きる。我々がカウントするのは 1 件、2 件という数字だ。だがその背後には「夫はコンクリートになってしまった」「私の恋人の上を車が走っているのだ」という嘆きが、その数の分だけある。

いつの時代も、安全衛生は命を背負う仕事だ。それを忘れてはならない。